資料6



介護現場革新会議パイロット事業 (熊本県版)【骨子】

令和元年(2019年)6月6日 熊本県



介護現場革新会議パイロット事業(熊本県版)【骨子】

本県を取りまく諸問題

- ○高齢化率は、30.6%と全国よりも高く、超高齢社会への対応は喫緊の課題。
- ○平成28年に発生した熊本地震の復興需要の影響もあり、全産業で人材確保が非常に厳しい状況。
- ○介護現場では、人材不足を理由として、サービスの提供縮小、基盤整備の先送り、介護職員の負担 感の増大など多くの課題を抱えている。

以上のことに加え、今後の人口減少を見据えた場合、地域で必要な介護サービスを確保するための 介護人材の確保・育成は急務であると考えている。

解決に向けて

取組の方向性

- ①介護現場(介護職自身)からの魅力発信
- ②人材不足の状況でも介護の質の維持・向上を可能とする介護現場のマネジメント
- ③働きやすい職場づくり、介護の質の向上につながる事業所運営の促進
- ④介護分野への若者の新規参入を促す取組の深化
 - ※関係団体と連携してパイロット事業に取り組むことで、これまで以上に強固なネットワーク を構築し、**今回の介護人材確保対策が自律的・継続的に取り組まれることを目指す。**
 - → 本県の特色を活かしながら、次ページのとおり具体的な取組を実施する。

具体的な取組

介護職が語る言葉からの 介護の魅力発信

- ■介護職員の
 - 姿・言葉を描くことで KAIGOの価値・魅力を発信する。
- クリエイティブディレクターと連携し た「介護のブランディング」。
- 介護職の言葉・写真を集めて介護の 魅力を発信するプロジェクトを実施。

介護ロボット・ICT・元気高齢者 活用モデルの構築







- マッチング
- モデル施設(2施設)を選定し、 業務分析を踏まえ、業務や課題を見 える化。
- 介護ロボット・ICT・介護アシスタン トの効果の高い活用モデルを構築。
- 好事例の共有・横展開を図る。

福祉系高校等と連携した 学校現場への働きかけ

■ 地域の福祉系高校の先生、福祉団体 (事業所等)、中学校の先生などが協力 しながら、地域ぐるみで「介護」への 関心を高めるためのモデルづくり を行う。

認知症の啓発を通じた 介護への理解促進

- 「介護の日」イベントと連携し、体験 型の啓発を実施。
 - ・VR認知症体験など
- 小学生や中高生に対する啓発活動



【その他の取組】

- 地域ニーズに応じた人材確保のための取組
 - ・地震の影響により人材不足が深刻な阿蘇地域における事業者連携の取組
 - ・山鹿市における人口減少を見据えた地域連携のサービス提供モデルの構築

など

○ **退職自衛官に対する福祉分野への再就職働きかけ** など

生涯現役促進地域連携事業 との連携

- 高齢者就労を進める牛涯現役促進地域 連携事業の重点分野として「介護アシ スタント確保しを設定。
- 協議会構成団体と連携し、入門的研修 受講者と事業所とのマッチングを推進。



介護職が語る言葉からの介護の魅力発信

【背景・課題等】

- ○「介護の魅力発信」については、これまでもパンフレットの作成・配布等に取り組んできたが、介護のイメージを変えることは難しかった。
- 〇昨年度開催した「介護の日」イベントにおいて、講演したマンジョット氏 (※) は、日本の介護の素晴らしさを語り、若者を含めた多くの参加者が共感した。
 - (※) マンジョット氏は、日本の介護の素晴らしさに気づき、その価値を発信していきたいとの強い思いを持ち、県内の常設型認知症カフェのプロデュースも手掛けた人物。
- ○また、講演では、<u>介護職員自身が、「介護の価値」や「世の中の期待」に気づいていないこ</u>とも指摘された。
- ○そのため、今年度は、本県と介護への思いを共有するマンジョット氏と協力し、**介護の現場** で輝いている介護職員自身からの魅力発信に取り組む。
- 〇将来的には、日本の介護(KAIGO)が、国内はもとより、世界をリードする高い価値あるサービスとして評価されることを目指す。

具体的な取組イメージ

- Oクリエイティブのカで、介護職の人たちから 介護の魅力を引き出すプロジェクト
 - ■介護職員の

姿・言葉を描くことで KAIGOの価値・魅力を発信する。 クリエイティブディレクター マンジョット・ベディ 氏



→ 次ページ参照

作成中

※マンジョット氏作品イメージ

KAIGO PRIDE

介護の仕事はカッコいい。

介護を必要とする人々が心地よく暮らすため、何ができるのか。 誰よりもパワフル。誰よりもクリエイティブ。 誰よりも理解してくれて、誰よりも寄り添ってくれる。 誰よりも強い心を持ち、誰よりも優しい心を持つ人々。 消えることなく胸に灯る、介護職という名のプライド。 190万人しかいない、日本が求めるプロフェッショナル。 だから、介護の仕事はカッコいい。

Self-respect が社会からのRespectを作る







福祉系高校等と連携した学校現場への働きかけ

【背景・課題等】

- 〇本県では、特に**地方部で介護人材不足が深刻**な問題となっている。
- ○また、これまで、地方部の介護現場に人材を輩出してきた**福祉系高校の定員充足率が低迷**し、 将来的に不安を抱えている。
- 〇このような中、新中学校学習指導要領(2021年度から全面実施)では、「**地域と連携**し、よりよい学校教育を目指す」こととされ、また、「技術・家庭科」には「介護など高齢者との関わり方」などの学習内容が追加された。
- ○この機を捉え、本県では、これまで福祉系高校と良好な関係を構築してきた強みを活かし、<u>小</u> **学生や中学生に向け、介護の大切さを伝える働きかけに、地域ぐるみでチャレンジ**する。

具体的な取組イメージ

- 〇地域の福祉系高校の先生、福祉団体(事業所等)及び中学校の先生などが連携し、中学生が「介護」や「高齢者との関わり方」などに関心を持てるような取組を、地域ぐるみで実施。
- 〇例えば、生徒が思い出に残るような介護の体験・調査学習などを通して、地域の役に立 つ喜びや優しさを育み、介護職への関心や地元での就労意欲を高めることを目指す。







認知症の啓発を通じた介護への理解促進

【背景・課題等】

- 〇超高齢社会が進展する中で、認知症になっても身近な地域で安心して暮らせる社会づくりが必要である。
- ○本県は、知事自ら認知症サポーターになるなど、サポーター養成数が「**人口比で10年連続日本一」**を達成しているが、県民アンケートの結果、「住み慣れた地域で安心して生活できる社会の実現のために足りないもの」は、「認知症施策」との回答が最も多かった。
- 〇このため、昨年度からは、認知症カフェの運営等の積極的な活動を行う県内14の団体を「認知症サポーターアクティブチーム (以下、「アクティブチーム」という。)」として認定するなど、県民が認知症に触れる機会を増やし、理解促進を図ってきた。
- ○今年度は、**更なる広報・啓発等を通して、認知症に対する理解を深め、その方々を支える存在** (介護職や地域住民)の意義を認識してもらう。

具体的な取組イメージ

- 〇「アクティブチーム」などと連携を図り、更なる理解を深めるための 体験型の啓発などに取り組んでいく。
- O例えば、「VR認知症体験」の実施や、介護従事者による小学生、 中高生への認知症ワンポイントアドバイス等の啓発活動など。

